

産経 health

› メタボリックシンドローム・ネット

› メタボリックシンドロームPRO

› 小児肥満ネット

› ニッポンの食、がんばれ!

産経健康倶楽部

Sankei Health Club

» [会員専用ページトップ](#)

「産経健康倶楽部」会員専用ページ

毎日の生活に役立つ情報をお届けする「産経健康倶楽部」へようこそ！
このページでは、登録された会員さまだけの注目情報を定期的に掲載します。



食がカラダを変える! *Special* 対談 **新連載**

vol.01 末期がん患者に気力と活力を吹き込んだ「漢方文化」

毎日の食生活から健康を考えるキャンペーン「食がカラダを変える!」。食と病気予防をテーマに、東洋医学と西洋医学の両分野の専門家をはじめ、栄養面とおいしさの両立を目指す料理研究家らが毎月1回、本サイトおよび産経新聞紙上に登場します。

初回は神奈川県知事の黒岩祐治氏と未病医学の権威・天野暁先生。お二人の出会いは、黒岩氏の父親が余命2カ月と宣告されたことがきっかけ。末期がんの患者に生きる気力と活力を吹き込んだ「漢方文化」の一端を、天野先生から教えてもらいましょう。



黒岩 祐治氏
神奈川県知事

×

天野 暁氏
東京大学 食の安全研究センター特任教授

INDEX

- ① 最先端治療は効かず
- ② 漢方文化に触れて
- ③ 医食同源 ー基本は食ー
- ④ 「いのち」を支える食のあり方
- ⑤ ピンピンコロリをめざして
- ⑥ 「薬食茶湯」のススメ

最先端治療は効かず

黒岩 天野先生とは、こうやって何度も対談やシンポジウムなどで一緒にお仕事をさせていただいていますが、出会いは約6年前に軽井沢で開催されたシンポジウムでしたね。親しくさせていただききっかけとなったのは、その後、あるNPOが主催した市民講座にお呼びいただいた際に、末期の肝臓がんで苦しむ父のことを相談したことです。偶然にも今日は、父の命日なのです。

天野 2回目の出会いとなった市民講座のテーマが「東洋医学と西洋医学の結合」。双方がお互いのいいところを補い合う、新しい医療の在り方を提案するものでした。黒岩さんはそれまでも医療の現場を数多く取材されており、その実態をよくご存じでしたが、新しい医療に関してはあまり聞かれたことがなかったのだと思います。そのシンポジウムの進行役を務めながら、黒岩さんの中で新しい何かが開けたのではないかと感じていました。

黒岩 そこでは「末期がんに対して西洋医学は有効か」ということを議論していたと思います。私自身、西洋医学の否定はしませんが、その限界はあるのではないかと感じていました。西洋医学の攻撃的医療は、若く体力のある人こそ元気にするけれど、老人のがんや再発した病気に対しては、かえてQOL(生活の質)を落とすと思うのです。がんで治療中の人たちのQOLの変化をグラフで描いてみると、西洋医学にだけ頼っている場合、あるときから急激に右肩下がりになる。そんなデータを見たことがあります。

父もまさにそのような状態でした。

6年前の夏、父に3cmの肝臓がんが見つかり、最先端の治療「肝動脈塞栓療法(TAE)」を受けました。カテーテルを通して体に優しいタイプの抗がん剤を注入するもので、1度目はとてもよく効きました。家族はもう治ったと内心よろこんでいたのですが、3カ月後、がんは6cmになってしまいました。医者は「(治療を)またやりましょう」と簡単に言うので、入院して2度目の治療を受けたのです。ところが、今度は副作用がひどくて七転八倒の苦しみに襲われました。何も食べられなくなって、坂道を転げ落ちるように具合が悪くなったのです。病院に入る前はあんなに元気だったのに、入院して治療を受けたら具合が悪くなってしまった…。父は、そのシンポジウムのころが一番ひどい状態でしたね。そんなときに天野先生から東洋的な漢方の思想を知りました。漢方は、QOLを優先して少しずつ治療をしていくと聞いたので、もっと知りたいと思いました。



天野 黒岩さんはシンポジウムに参加していた先生たちに、この先どんな手を施したらいいのかなどと熱心に質問していましたね。言わなかったけれど、その日は非常に落ち込んだ顔をしていましたよ。

黒岩 漢方では、病気だけを診るのではなく体全体を見ます。その際に大事なのが「気血水(きけつすい)」の3つのバランスがとれているかどうか。そして、病気の直前状態である“未病を治す”ことに力を入れるのです。そこで登場するのが医食同源という考え方で、食には非常に大きな意味があるというわけです。西洋医学的にいうと、免疫力を高めるといえるのでしょうか。この漢方の、体の底力を上げていくという考え方と、西洋医学の攻撃的医療を同時にうまく結合させれば、QOLを優先した治療ができるのではないかと、そのシンポジウムで先生たちは討議していました。そこで閉会后、父の場合はどうしたらいいのかと具体的に聞いたのです。しかし、新しい医療の理念を語った先生たちの反応はわりと冷やかで「末期の状態だし、お年もお年だから、何でもやってみたらいいんじゃないですか」と。

天野 先生たちの代弁をさせていただくと…黒岩さんのお父さんは相当なお年でしたし、すでに一流の病院で治療を受けていたため、このような状態の患者を新たに診たくはなかったのでしょうか。例えば、治らない人にコーヒーを飲ませて亡くなったらコーヒーのせいになる。同じように黒岩さんとの関係も失われてしまう…おそらく、先生たちはそう思っていたのでしょうか。医者としても、全く可能性のない人にチャレンジするわけにはいかないのです。黒岩さんにとっては、ある意味でショックだったのかもかもしれません。

んが。

黒岩

私は天野先生に、東洋医学の専門家として父の状態を診てほしいとお願いしました。「未病は専門でも、がんは専門ではない」と言いながらも、天野先生は父が入院している神戸の病院まで訪ねてくださいました。病院の主治医も協力的でした。若いドクターだったのですが、彼も漢方に関心があったのでしょう。だからデータを全部出してくれました。天野先生は、そのドクターを前に漢方の説明をして、父を診察してくださいました。

🔗 [インデックスへ戻る](#)



📧 [お問い合わせ](#) 🗺️ [サイトマップ](#) 📄 [プライバシーポリシー](#)

Co